
天使の火

鈴雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の火

【Nコード】

N2323J

【作者名】

鈴雪

【あらすじ】

これは狐火、エンジェルダスト二つの番外編のものです。二つの作品の設定資料も載せる予定ですのでよろしければ見に来てください。

新年あけましておめでとう！

「ほら、それ早く！」

「それこつちこつち！」

「君のは真ん中に置いて！！」

「ねえこれどこ？」

暗い闇の中で幾人もの人間がどたと動き回っている。

そして、しばらくすると音が途切れ……唐突に明るくなった。

そこには袴や振袖を着込んだ空狐、舞、イヴはいつも通り空狐の頭の上、そして、ノエルとアルト、それから刹那に朱音、さらにハルに竜馬とはやなに香苗、アグニに月狐と銀狐が正座している。

で、全員が一度大きく息を吸つい、

『新年あけましておめでとうございます！』

と全員がぴったりのタイミングで丁寧な頭を下げた。

場所は刹那邸の広めの部屋を襖を外して会場用に広げた部屋。そこに角松や獅子舞が飾られている。そして『2010年おめでとう』の垂れ幕。

その下にワンポイントとして、さり気なく空狐の『天月』やノエルの『蒼窮』がクロスして飾られている。

そう、今ここでは新年を祝うための催しがなされるのだ！

「ついに新年だね空狐くん！」

「ですな舞さん」

うきうき語るのは長く綺麗な黒髪の少女、舞。その横に座っていた少年、空狐も笑う。また新しい一年が始まるのだからうきうきしないわけがない。

「ママ、あけましておめでとう！」

「うん、あけましておめでとう。アルト」

綺麗な金色の髪と紅い目の女の子、アルトの新年の挨拶に彼女の母親代わりであるノエルがにっこり笑いながら頭をなでる。若干ノ

エルを知るアルトよりも背が高いけどそこは華麗にスルーされることとなった。

それを火きりに各々が「おめでとー」「よろしくー」と新年の挨拶を交し始めた。

それが一段落したところで即席の壇上上がった刹那と朱音がマイクを取り出すとみんなが注目する。

二人はぺこつと頭を下げた。

「えー、でわ、これより新年合同イベント『あけましておめでとー2010年！ 今年もよろしくの会』を開催します！」

パチパチと全員の拍手が鳴り響く。

「というわけで、まずは空狐アンドノエルによる新年の挨拶です！」と突然の朱音の発言に、いきなり振られた二人が狼狽する。

「え…… ちょ、ちょっと僕は聞いてないよそんなこと！？」

いきなり話を振られた灰色の髪と紅い目の少年、空狐が刹那に、「そ、そうだよ！ 挨拶は朱音さんがするはずだったよね。どうなってるの！？」

アルトと同じ綺麗な長い金色の髪と透き通った瑠璃色の目の女性、ノエルは朱音に詰め寄る。

「まあ、がんばれ。代表」

「がんばってね。代表なんだから」

二人の返答に涙を流すノエルと空狐。たぶん、なに言ってもスルーされるのは目に見えている。

諦めてマイクを受け取って台に上がる二人。なんとなく、そのすけた雰囲気こそっくりだったたりするのはご愛嬌。

「えー、なんかわからないけどいきなり代表を押し付けられた、ノエル・テストロッサです。新年あけましておめでとーございます」

「木霊空狐です。新年あけましておめでとーございます」

壇上に上がると気を取り直してぺこつと頭を下げる二人。

「昨年は、みなさんいいこと悪いこと色々な出来事がありましたと思います」

ノエルが朗々と語り、

「ですが、それでも楽しい一年でした。みなさんもそうだと考えています」

空狐が続く。

「まあ、堅苦しい挨拶は抜きにして……」

こほんとノエルが咳払いする。

『今日は大いに騒ぎましょう！』

突然押し付けられた割には息がぴったりな二人だった。

『おーー！！』

空狐とノエルの言葉に全員が歓声を上げた。さつそく、食事に入りついたり、初めてあった相手に自己紹介をしたりなどをしている。それを終えると用意されたご馳走にみんなの箸が伸びる。

そこに、刹那が冴えない男性を壇上に上げて、

「雪さん今年の目標はなんですか？」

「えー、することはきつちりとできるようにしたいと……」

と、一年の抱負を言わせていたのだが、みんなぜんぜん注目してなかったりする。

空狐も好物のいなり寿司を頬張っていたら。

「改めて初めまして木霊空狐くん。アルトの母のノエル・テストロツサです。いつも娘がお世話になっていきます」

と、ノエルが微笑みかけながら空狐に話しかけてきた。彼女の着ているのは薄い水色で要所要所に花の模様があしらわれた振袖で、彼女の柔らかな雰囲気を実際立たせている。

ずっと彼女は空狐に手を差し出した。

「あつ、ご丁寧にありがとうございます。こちらこそお世話になっています」

差し出された手を握って、ぺこつと頭を下げる空狐。それからお互いにお互いの顔をまじまじと見て、

（なんか他人の気がしない）

色々とシンパシーを感じていた。会ったばかりではあるが、二人

ともベクトルはちょっと違うが、わりと似たような属性をもってるからなのかもしれない。

「どーしたの空狐くん？」

訝しげに空狐の顔を覗き込む舞。

「いえ、何でもないです」

被りを振る空狐。変に共感したこと話すのもちょっとあれだなと思っ
てそう答えたのだが、そこで朱音が、

「もしかして、ノエルに惚れた？」

ニヤリと笑いながらそんなことをたまった。

まあ、空狐には舞がいるわけだからそんなことはないのは朱音もわかっていたが、そこはお約束である。

「えっ！ そうなの空狐くん?!」

「ち、違うよ！ そんなことないってば！」

空狐は慌てて朱音の言葉を否定する。確かに綺麗な人だなとか、振袖の下から押し上げている豊かな胸に若干、目が行ってたのは否定できないのだが……

だが、そこにノエルの親友であるはやなが現れた。

「え〜？ 君、ノエルに惚れちゃったの〜？」

……その顔はほんのり赤く、息はアルコール臭かった。その手には空になったグラス。そして、その後ろでにやりと笑う月狐。

「ちょ、はやなさんどうしたんだよ?!」

「ん〜、なにがあ？」

とろんとした表情ではやなは返してからはやなが空狐に向き直る。絶対酔ってるよこの人と、空狐は引いていた。

「空狐君だっけ〜？ ノエルは止めといた方がいいよ〜。今のところね〜、告白した人をみ〜んな振っちゃってるからね〜」

と面白そうにけらけら笑う。だけど、それからふと思案顔になつて、

「あっ、でも〜、もしかしたら〜ノエルの好みが、実はかわいい系だったからとか？ なら君は合格なのかもね〜」

なんとなく空狐と舞の間にあるものは察してはいるが、からかいたい衝動を抑えもせずに爆弾を投下した。

少しだけ舞の目の中に、ノエルへの警戒の色が浮かぶ。

「ノエルちゃんってそうだったんだあ」

香苗が驚いたように目を見開く。なお、彼女は地であるが、煽るような行為になってしまったのはいたしかたない。

「ち、違う！ 僕はそもそも……」

そして、彼女も慌てて否定するが、

「ほくら、ノエル、いっちゃえ」

いつの間にか後ろに回りこんでいたはやなに、後ろからどんと押された。

バランスを崩し、ノエルは空狐の方に倒れ込む。慌てて支えようとする空狐だったのだが、

『うわっ！？』

空狐もバランスを崩してしまう。床に倒れる二人。そして、その唇が……

「わーーーーー！？」

僕は慌てて跳ね起きた。そして、そばに置いてあった待機状態の蒼窮をブレード形態に戻し、周りを確認する。

ゆ、夢？ そうか、夢か……

まあそうだよな。まだ夏の直前。新年はまだ半年先だしな。あー、安心した。だって、男とキスするなんて耐えられん。たとえ女の子みたいな相手だとしても！

「ん、ママ……どうしたの？」

『いかがしましたマスター？』

一緒に寝ていたアルトが眠そうに目を擦りながら起きてしまった。しまった。起こしちゃった。蒼穹も突然の呼び出しに困惑気味だった。

「ああ、ごめんねアルト、蒼窮。ちょっと変な夢見ちゃっただけだ

から。もう少し寝てていいよ」

「うん」

『了解しました』

僕は蒼窮をペンダントに戻す。それから眠そうなアルトにタオルケットをかけ直して、そつと撫でてあげた。

にしても……リアルな夢だったなあ。微かだけど最後の感触が唇に残ってるよ。はあ……僕、一応男だったのになあ……もしかして自分でも気づかなかったけど、そっちの気があったのか？

そう考えた瞬間、ぶるつと背筋に寒気が走った。うう、いやなことを考えてしまった……

「わきゃあ?!」

僕は跳ね起きた。耳も尻尾もぴーんと立ってしまっている。慌て周りを警戒。ここは……僕の部屋？ よ、よかったあ。ただの夢かあ。まあ、よく考えると新年の挨拶なんてまだずつと先だよなあ。

僕は頭頂部の耳をポリポリかく。

「どうしたのよ空狐、いきなり大声出して」

パタパタとイヴがベッドの脇の台の上に置いてあるイヴ用のベッド（最近買ったミニチュアのベッド）の上で体を起こして聞いてきた。

「ううん、なんでもない。変な夢を見ただけだから」

そう応えると途端に興味を無くしたのか、イヴはそうとだけ言っ てまたパタンとベッドに潜り込んですやすや寝息を立てながら眠り直す。

ふう、とため息をついて僕もベッドに潜り込む。

にしても、おかしな夢だったなあ。明晰夢ってやつか？

なんか、ノエルさんだったかな？ 彼女が倒れこんできた時の柔らかい感触とかしつかり残ってるし、最後のも微かだけど触れるか触れないかほどの……

考えたら恥ずかしくなってきた。もう寝よ。

起きるとなんか舞さんの機嫌が悪かった。

いつも通りに見えるんだけど、長い付き合いから機嫌がわるいのがよくわかる。

行動の端々でなにかに当たるような行動、特に僕の洗濯物を干すときなんか一瞬破けるんじゃないかとはらはらするぐらいに。

「ま、舞さん？ どうしたの？」

で、ついに朝ごはんを食べてるときに聞いてみた。

なお、朝ごはんも、舞さんなら目玉焼きも綺麗な満月なはずなのに、無残に崩れ、ご飯もちよつと茶碗からはみ出したりしている。

「ん？ なんのことかなあ？」

につこり笑ってるけど、その目は確実に、なんかわからないけど怒ってる？ いったいどうしたんだよ舞さん！？

その日、僕は必要以上に気を使いながら生活することとなってしまったのだった。

新年あけましておめでとう！（後書き）

2010年あけましておめでとうございます。
今年もどうかよろしく願っています。

あけましてぶっちゃんけーく！ in 狐火！（前書き）

あけましておめでとつございます！ 今年もどうかよろしく願い
いたします。

あけましてぶっちゃけトーク！ in 狐火！

空「どうも空狐です」

舞「こんにちは舞です！」

イヴ「みんなのアイドルイヴちゃんですよー！」

空「せーの」

空&舞&イヴ「あけましておめでとうございますー！」

空「ついに2011年だねえ舞さん」

舞「そうだね空狐くん。私たちの話が始まってもうすぐ三年経つんだね」

刹那（以下刹）「というわけで本日はぶっちゃけトーク！」

イヴ「おーっと、いきなり刹那が乱入だあ！！ と、ここから実況解説は私イヴがお伝えしますー！」

空「うお！ 刹那君どこから出てきたのさ？！」

刹「その土管から」

空「君はマ オか？」

刹「まー気にすんな。それよりこの世界の創造者からお題が出てるぜ？」

舞「創造者って？」

刹「じゃあ、お題発表！」

イヴ「懐からメモを出したけど、それがお題みたいね」

空「それに逃げたな。ところで朱音さんは？」

刹「エンジェルダストに出張してる」

空「ああ、ノエルさんのところね」

イヴ「彼女も大変ねえ。と、刹那がメモを開きました」

刹「実況しなくてもいいだろうに。では、『狐火の最初の姿を語る』が今回のお題だ」

空「おっけー。つつこむのはもう止めよう」

舞「『狐火』ってだいたい最初のプロットから変わったよねえ」

空「（あっさり順応したな……）だね。元はこんな感じじゃなかったね。原型はだいたい狐火スタートの半年前に作られたんだっけ」
舞「空狐くんが里を離れるのは一緒だけど、行き倒れて私に拾われるって内容だったね」

空「で、行く場所ないから舞さんが僕に家が決まるまでいていいよって言うてくれるストーリー」

刹「この時点ですでに俺は近所に住む人間だったな。朱音いないけど」

イヴ「私もいないし、空狐も純粋な妖怪だったしねえ、空狐が里を離れるのは確か『人と暮らしてみたい』って理由だったっけ」

舞「一応数話分は書いたんだっけね」

刹「構想ではラストの部分もあるぞ。どういう経過かは分からないが、途中で突然現れた魔王と戦ったりとか、めちゃくちゃな内容で、本人曰わく『なかつたことにしたい負の遺産』らしいな」

空「それがベースの僕らって……」

イヴ「なにせ、魔法な世界なはずなのに電気あったりするしね。まあ、某精霊のお話ではそういう力を電気に変換するって設定あるけど、そういうのもなかったしね」

刹「で、時間に余裕ができたから大幅に内容を作り直して現在の形になると……」

舞「この時点で空狐くんは半妖で私の従兄弟ってなったんだよね」

イヴ「二人の繋がりが薄かったからその見直し。あと、ある設定の追加で空狐が半妖が都合がよくなったらしいよ」

刹「なんせ家に置いた理由は『一人は寂しい』程度だからなあ。ある設定に関してはまだなにも言えないが、あいつ中間の存在が好きなんだよ」

イヴ「実は犬夜叉の影響もあったりして……」

空「危ないこと言わないでイヴ……ノエルさんといい確かに」

刹「あと、ボツになったキャラ設定もいろいろあるな」

舞「へえ？　どんなの？」

刹「舞がかなり度の入ったヤンデレで、密かに空狐の周りに人間が近づかないよう裏工作してるとか。こう、『空狐くんは私のものだから、近づいたら容赦しないよ?』って女子に脅しをかけたリね」
舞「私そんな役だったんだ……」

イヴ「まあ、嫌よねそういうキャラ。がっかりするのわかるわ。ちなみにまだ色々あるわよ」

刹「空狐のシャツをこっそり拝借して着てみたり、匂いを嗅いだりしては興奮するっていう危ない設定や、ゲームが異様に得意で、初めてプレイしたゲームで熟練の空狐を打ち破ったりとかな」

イヴ「ゲームでずたばろにされるって言うのは美狐編で流用、あと、銃捌きが異様にうまいのもこの設定から来てるわね」

舞「私って……」

空「二人ともとどめ刺さないで。うん、ちょっとそれは怖いけど、僕はたぶん大丈夫かな? 学校で一人はよくあつたし、そのくらいで嫌いになつたりしないよ」

舞「空狐くん……」

イヴ「なお、空狐は発情期の設定があつて、舞を襲うなんていう予定もあつたわね(ニヤリ)」

舞「え? く、空狐くんが私を……」

空「ちよつと待ってー……!! ば、僕だつてそんなの嫌だからね? できたらロマンチックに」

舞「え? あ、そんな……」

イヴ「さて、二人がいい感じに自分たちの世界に飛び立つ前に今後の話しね」

舞「あ、そうだね。空狐くん」

空「はい。狐火は今度こそ年内に完結させます。文化祭編が終わったら完結一直線です」

刹「ある程度、世界の根幹にかかわる話しやるけど、結局設定活かしきれないんだよなあ」

空「言わないでよ……」

イヴ「私も残念ね。天月の秘密も私の秘密もほとんど明かされないままだし……てか、空狐たちVS魔王っていう予定はどこにいったの？」

舞「まあまあ、それよりも、私たちの活躍をしっかり見てくださいねー。特に私はばんばか乱れ撃ちまくりです！」

刹「んじゃ、今回はこのくらいか、じゃあみんな一緒に」

一同『今年もどうかよろしくお願いします!!』

あけましてぶっちゃけトーク！ in エンジェルダスト

ノエル（以下ノ）「あけましておめでとうございまーす！」

アルト（以下ア）「まーす！」

朱音（以下朱）「というわけでこっちもお題があるよー」

アグニ（以下アグ）「こっちの意味がわからないが、お題？」

朱「うん、『エンジェルダスト』の裏話ね」

ノ「裏話？」

アグ「設定やらなんやらに影響を与えたものの話だな」

ノ「ふーん。例えば？」

朱「そうだね……機械天使は元々『ガメラ』から思いついたとか」
ノ「そうだったの?!」

アグ「説明しよう！ ここで言うガメラはもちろん平成版。古代ア
トランティスで生まれた災いであるギャオスに対抗するために生み
出された地球の守護者である亀の怪獣だ」

朱「ええ、地球の守護神ガメラ。そこから文明の守護者機械天使ね。
精霊炉もガメラのプラズマ炉が元ネタ。あれもマナからエネルギー
変換するから」

朱「あれは名作だねえ。そこからKOS-MOSや仮面ライダーや
らを元に設定を練ったみたいだよ。圭一が特異能力者だったのも、
アギトが特殊な力を持つ人間から進化したってことから来てるみた
いだし」

アグ「KOS-MOSはゼノサーガのメインキャラ。ヴェクター・
インダストリー製の最新型アンドロイド。レアリエンという人造人
間が主流の世界だから、完全な機械の彼女はかなり珍しい存在で、
作品の根幹にも関わってる。ちなみにあだ名は邪神モッコス」

ノ「僕、怪獣が元だったんだ……」

朱「武装を転送はKOS-MOSからね。他にも明らかに仮面ライ
ダーってわかる部分あるわね。『エクシードドライブ』なんて55

5とWの必殺技の切り張りだし。空断・煌きもキックを剣に置き換えたって感じかしら」

アグ「敵であるヴェノムはレギオンやBETA、フェストウムを足して水増ししてから割ったような感じだとさ……どこにフェストウムの要素があるかは全くわからんが」

朱「たぶん、群体で存在するってことでしょ？ 本人曰わく『インディペンデンスデイ』の異星人もイメージソースだって」

ノ「もう訳がわかんないね……」

アグ「こんなこあともあるうかと調べといたぞ！ レギオンは『ガメラ2』の敵だったケイ素生命体のこと。フェストウムはアニメ『蒼穹のファフナー』に出てきたケイ素生命体。読心能力と他者と同化する力で人類を脅かした。BETAはゲーム『マブラヴ』に登場した侵略者。突然地球に侵攻してきて、人類を崖っぷちに追い詰めてる。『インディペンデンスデイ』はアメリカのSF映画。エイリアンによる侵略に立ち向かう人間の話だ。どれもあいつのお気に入りだな」

ノ「そういう意味じゃないんだけどなあ。あと、なんかくどい気がするよ」

アグ「『説明しよう！』と『こんなこともあるかと』は男の、そして科学者のロマンだぞ……」

朱「確かに、ヤッターマンのおしおきだべーや、宇宙戦艦ヤマトの真田さんのあのセリフは印象深いわね。刹那（朱音の幼馴染の夫）も放送当時、言ってみたって言ってたし」

ノ「宇宙戦艦ヤマトが放送してる世代ってことは……」

朱「ノエル、なにか言い残すことある？」

ノ「い、いえ、なんでもありません……」

アグ「例の小型種は言ってみればミョルニア（マスター型フェストウム）の立ち位置のつもりらしい」

ノ「それってつまり、元人間じゃないの？」

アグ「いや、ようするに種からの独立個体と言いたいみたいだ。ち

ねみにミヨルニアは『蒼穹のファフナー』の敵対生命体フェステウムのマスター型と呼ばれる存在。かつて主人公真壁一騎の母、紅音と同化したことで、終盤で『人類との共存』という意味を継ぐ存在になり一騎たちに協力したんだ」

朱「ついでに言うと、ノエルが武器を取り込むことで強化するなんてのも考えていたみたいだね」

ノ「僕ってマークザインだったの?!」

アグ「ちなみにマークザインは『蒼穹のファフナー』の二代目主人公機。『一人でも多くの兵士を生き残らせる』という思想の基で開発された。主に武器と同化することで飛躍的にその力を向上させる能力やフェステウムも逆に同化させることもできたりする」

ア「ママ」

ノ「なに？」

ア「ママにも26の秘密があるの？」

ノ「いや、流石にそれはないかなあ……ってアルト、どこでそんなの覚えたの？」

ア「おじちゃんが教えてくれた」

ノ「そうなんだ……」

アグ「26の秘密は仮面ライダーV3からだな。でも、本編で26全部出てないんだよなあ」

朱「余談だけどストーリーも元は仮面ライダーに近い展開を考えてみたい」

ノ「へえ、どんなの？」

朱「ノエルは神無とは違う組織に拉致されて改造手術を施されるんだけど、失敗作として廃棄処分されるはずだった。だけど、その寸前に脱走に成功して、神無に保護されるって感じ」

アグ「そこから改造手術をした組織に復讐するために戦うって内容だな。アルトは実験で生み出されたノエルのクローンで、朱音は直属の上司だったな」

朱「で、ノエルの製作データから作られた人造人間たちと戦うと…

…割とダークな内容だったわねー」

ノ「確かに……いや、今のもコメディ入ってるけど実は所々で、倫理に反する部分があるんですが……」

朱「そうね、ノエルが狂人なのはどっちもだし」

ノ「僕ってそんな扱い?!」

アグ「一応『冷静に狂ってる人間』が設計コンセプトらしい」

ノ「僕って……」

朱「さて、暗い話は置いて、他にもおもしろい話をしましょつか。まずノエルの名前」

ア「ママのお名前?」

朱「うん、ノエル、君の名前の意味はわかる?」

ノ「ラテン語で『誕生』ですよね?」

朱「うん。でもその名前には他にも意図があっただよ」

ア「えっ? お姉ちゃんどんなの?」

朱「ガブリエル、ウリエル、ラファエル、ミカエル……天使ってだいたい名前の末尾に『エル』がつくでしょ?」

ノ「あ」

朱「で、ノエルは『NO + EL』……末尾に天使を表すエルが付いてるの」

ノ「そうだったのか!」

朱「やっぱ気づいてなかったのね。ちなみにエルはヘブライ語で「神」を意味する言葉。天使が神に近いものってことね」

アグ「まあ、ノエルの名前はある種の皮肉もあるな」

ノ「皮肉?」

朱「それはそのうち語るわ。ついでに剣の名前が『蒼穹』なのは天使が飛ぶなら綺麗な空がいいんじゃないかっていうことから」

蒼穹「余談ですが、登場するはずだった私の仲間の神剣も『空』に関する名前の予定でした」

朱「そこら辺は『狐火!』の空狐と舞の武器が『月』を名前に入れているのと同じ理由ね」

アグ「ちよつとした関係もあるが、これは両のストーリーが進めば
わかってくる……はずだ」

ノ「曖昧だなあ」

蒼穹「私も兄弟たちに会いたいです……」

朱「なお、狐火にはアルトや私が出てますが、エンジェルダストから十一年後の姿となっています」

ア「えー、アルト小さい……ママみたいなぼんきゅぼんじゃないの
ー？」

朱「残念だけど、そうじゃないのよね」

ノ「いや、その言葉……いや、いや。後でしめとこ」

アグ「じゃあ、今回はここにしておくか」

ノ「それでは……」

一同『みなさん、今年もよろしく願いいたします』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323j/>

天使の火

2011年3月27日20時11分発行